

文法関係とヴォイス: オーストロネシア諸語の状況

柴谷方良(ライス大学)

1. 本発表は、オーストロネシア諸語のうち、オセアニア語派を除く西オーストロネシア諸語で、いわゆるフォーカス構文(その形態素を喪失したのものも含める)を有するものについて、果たしてフォーカス構文と呼ばれるものがヴォイス現象として取り扱われるべきか否かについて論じる。
2. 問題となるのは、以下に見られるような、文末名詞句をめぐる構文の交替である。

Kavalan (台湾, Li and Tsuchida 2006:26-27)

- (1) a. q-<m>aRat saku ‘**nay** ‘**tu** **mutun**. (AF)
 <AF>bite cat that OBL rat
 ‘That cat bit a rat.’
- b. qaRat-an na saku **mutun** ‘**nay**. (PF)
 bite-PF 3GEN cat rat that
 ‘That rat was bitten by a cat.’
- c. Ribaut-an na **ya** **iRuR** **a** **zau**. (LF)
 fish-LF 3GEN NOM stream LIG this
 ‘This stream is where he fishes.’
- d. ti-tabu na tina-ku tu baut **ya** **biRi**. (RF)
 RF-wrap 3GEN mother-my OBL fish NOM leaf
 ‘My mother wrapped fish with the leaf.’

これらの構文の解釈については、二つの密接な関係にある問題が議論されなければならない。その一つは、ゴシック体で示された文末の名詞句が主語であるのか、という点であり、第二の問題は、(b)–(d)の構文は受け身なのか、受け身でない他のタイプのヴォイス構文なのか、それともヴォイス構文ではないのか、というものである。従来の見解は、大きく三つに分類できる。第一の見解は、Bloomfield(1917)からの伝統を汲むもので、上例の Li and Tsuchida (2006)によるグロス付け NOM (nominative)や(1b)の訳文から伺えるように、これによれば、文末の名詞句は主語として見做され、(1b)–(1d)の構文は、受け身文として取り扱われる。マラガシについての Keenan (1976)や Keenan and Comrie (1977)、それに他の言語のフォーカス構文をこの立場から記述した・する研究者の数はかなりにのぼる。

第二の見解は、主にタガログ語その他フィリピン諸語の研究者(例えば Schachter and Otnes 1972)の間で行われてきたもので、これによれば、上例構文の文末名詞句に対応するものはトピックであり、構文交替はトピック化(Topicalization)現象であって、ヴォイス現象ではないと見做される。

一方、近年盛んになってきた第三の立場は、上例の交替はヴォイス現象であるけれども、能動・受動対立でなく(つまり(1b)–(1d)は受け身文でなく)、別種のヴォイス対立と見做すもので(1a)は AV (Actor voice)、(1b)は UV (Undergoer voice)、(1c)は LV (Locative voice)、(1d)は RV (Referential voice)、または CV (Circumstantial voice)などと解釈される。

3. フォーカス構文の取り扱いを巡る上記のさまざまな解釈(その他、生成文法の観点からの異なった取り扱い)の可能性の原因になっているのが、(i)タガログ語を始めとするフィリピン諸語、上例のカヴァラン語その他の台湾(Formosan)諸語、それにマラガシなどにはフォーカス構文以外に西洋語に見られる能動・受動の対立が存在しないということと、(ii)フォーカス構文の交替が文法関係の主語を軸として起こっているのか、それともトピックという別タイプの文法範疇が関与しているのかが明確でないという、二つの問題である。

このような問題を考える上で有益であるのが、一つは日本語のように、受け身が存在し、かつ助詞「が」によって標示される主語と、「は」標示を受けるトピックとが明確な形で分けられている言語との対照研究である。オーストロネシアの観点から日本語を見れば逆に、日本語における受け身文(2a)とトピック文(2b)との相違は何か、またトピック文(2b)と非トピック文(2c)の対立はヴォイス現象であるのか、ないのかといった疑問を考えさせることになる。

- (2) a. この本は、多くの人達によって読まれている。
- b. この本は、多くの人達が読んでいる。
- c. 多くの人達がこの本を読んでいる。

4. 実は、本研究で対象としている諸語で、フォーカス構文とは独立して、日本語のように受け身文を有し、なおかつ(1)で見たオーストロネシアタイプのトピックと、英語・日本語タイプの主語とが明確に区別されている言語がインドネシアに存在する。このような言語とタガログ語その他との比較・対照がオーストロネシアタイプのフォーカス構文や日本語のトピック構文をめぐる諸問題、特にそれがヴォイス現象の表れなのか、などといった問題に迫る上でも有益であることは言を待たない。

インドネシア標準語 Bahasa Indonesia およびマレーシア標準語 Bahasa Melayu などがこの部類に入るが、本発表ではトピックと主語の区別がより明確なササク語(Bahasa Sasak)を取り上げて、受け身構文とフォーカス構文の相違を明らかにし、後者を受け身、ないしはそれなどと同様のヴォイス現象として取り扱うことの是非について、一定の判断を下したい。

プロト・オーストロネシアのフォーカス構文を受け継ぐ現代語には、(1)のように四つのフォーカス構文(カヴァランの上例では、PF が LF と形態的には一緒になっている)の対立を維持する台湾諸語、フィリピン諸語、マラガシなど以外に、台湾サオ語(Thao)やマレーシア・サラワク地方のルン・ダエ語(Lun Dayeh)のようにフォーカスの対立が三つに減少したものがある。一方、インドネシア諸語の多くは、フォーカス対立が、(1a)と(1b)に対応する AF・PF の二項対立に縮小してしまっている。またこれらの言語では、構文対立は存続しているものの、形態的対立を無くしているものも、東インドネシア地方には多い。標準インドネシア語、バリ語、そしてササク語のある方言のように、AF・PF 対立が形態的に、プロト・オーストロネシア AF 接辞*〈um〉を引き継ぐ鼻音接辞または鼻音化によって表される AF 構文(3a)とゼロ接辞ないしは非鼻音形式の PF 構文(3b)のように形態的対立を伴うものがある一方、(4a)・(4b)のように、ササク語の他の方

言やスンバワ語、ビマ語のように、形態的対立を失ってしまって、フォーカス対立が構文的対立としてのみ存続しているものがある。

(3) Pancor ngeno-ngené Sasak (形態的対立あり)

- a. **Loq Ali mbace** buku ini. (AF)
 ART Ali AF.read book this
 ‘Mr. Ali reads this book.’
- b. **Buku ini** bace isiq loq Ali. (PF)
 book this PF.read by ART Ali
 ‘Mr. Ali reads this book.’

(4) Puyung meno-mené Sasak (多くの動詞が形態的対立を失っている)

- a. **Ali** nyengke bace buku=ni. (AF)
 Ali PROG read book=this
 ‘Ali is reading this book.’
- b. **Buku=ni** nyengke bace siq Ali. (PF)
 book=this PROG read by Ali
 ‘Ali is reading this book.’

さらに、これらインドネシア諸語には次の例のように、フォーカス形態素の有無にかかわらず西洋語や日本語の受け身に対応する構文がある。

(5) Pancor ngeno-ngené Sasak

- Buku ini te-bace** isiq loq Ali. (Passive)
 book this PASS-read by ART Ali.
 ‘This book is read by Mr. Ali.’

(6) Puyung meno-mené Sasak

- Buku=ni te-bace** siq Ali (Passive)
 book=this PASS-read by Ali
 ‘This book is read by Ali.’

5. ササクにおいては、トピックと主語の区別が明確な形でつけられている。(3)–(6)において文頭のゴシック体で示された名詞句が、カヴァランの例文(1a)–(1d)の文末名詞句に対応するトピックである。主語は、AF 構文(3a)・(4a)や受け身文(5)・(6)のように、トピックと重複した形式で現れることが多いが、PF 構文(3b)・(4b)では、トピックが文頭に、そして主語は前置詞 (i)siq を伴って文末に来ることが多く、このタイプの構文においては、トピックと主語が形式的に分化している。(前置詞 (i)siq は非トピック動作主を標示し、(3b)・(4b)の非トピック動作主主語や受け身文(5)・(6)の非トピック動作主斜格目的語などが標示対象となる。(i)siq よって標示された主語と斜角目的語の統語的相違は、以下(10)・(11)の比較によって明らかにされる。)

ササクの主語とトピックは次のように、幾つかの統語特性によって区別される。

(7) Sasak subject properties

- a. Cliticization
 b. Reflexive binding
 c. Relativizer-selection in Bagu meno-mené Sasak

(8) Sasak Topic properties

- a. Relativization
- b. “Want”-type control
- c. Control in coordination

ササクの主語統語特性のうち、クリティック化 (cliticization) は英語の主語による一致現象と全く同様に働くので、これを次に示す。

(9) Sasak cliticization (Puyung meno-mené)

S (Argument of intransitives) cliticizes

- a. (Aku) mu=**k** lalo jok peken.
I PST=1 go to market
‘I went to the market.’
- b. Mu=**m** lalo jok peken.
PST=2 go to market
‘You went to the market.’
- c. Inaq mu=**n** lalo jok peken.
mother PST=3 go to market
‘Mother went to the market.’
Cf. John walks. (S agrees with the verb)

A (Agent of transitives) cliticizes

- a. Mu=**k** empuk Ali
PST=1 hit Ali
‘I hit Ali.’
- b. Inaq mu=**n** empuk aku
mother PST=3 hit I
‘Mother hit me.’
CF. John hits me. (A agrees with the verb)

P (Patient of transitives) does not cliticize

- *Aku mu=**n** Ali.
I PST=**3** Ali
‘I hit Ali.’
Cf. *I hits John. (P does not agree with the verb)

以上の例では、主語がトピックと重複して現れているので、これらのいずれの文法範疇がクリティック化を引き起こしているのか不明である。しかし、トピックと主語が分化して起こる PF 構文を見れば、主語がこの現象を支配していることが明らかになる。以下の例から、siq Ali が3人称クリティック-n を支配していることが判明し、PF 構文では、トピック((10) の Aku)でなく、別の名詞句が関与することが分かる。そして、問題の名詞句は、自動詞の S 項、他動詞の動作主 A 項であることから、つまり英語の一致が S および A からなる「主語」によって引き起こされる状況と同様であることから、主語という統語範疇がササクにも認められることになる。

(10) Cliticization in PF constructions (A cliticizes)

Aku mu-n empuk siq Ali (PF)
I PST=3 hit by Ali
'Ali hit me.'

ササクのような言語でヴォイスを考える場合に重要な役割を果たすのが受け身文であって、受け身文の統語特性とPF構文を比較することによって、PF構文を受け身文と見做すことの是非が明らかになる。次が受け身文におけるクリティック化の状況である。

(11) Cliticization in Passive constructions (P cliticizes)

Aku mu=k te-empuk siq Ali.
I PST=1 PASS-hit by Ali
'I was hit by Ali.'

上例のように、受け身文ではPが主語となって、それがクリティックを支配する。これは、英語などの受け身文で、Pが主語となって、上例英訳のように一致を支配する状況と全く平行的である。

(10)のPF構文と(11)の受け身文におけるクリティック化現象一つをとってみても、オーストロネシアのPF構文を受け身文と見做す伝統的な解釈には大いなる問題がある。受け身文は、Pを主語、Aを斜格目的語(OBL)とするが、PF構文においては、Aが主語、Pは目的語というように、能動文と同じ文法関係の配列を維持している。AF構文、PF構文、受け身文における意味役割(semantic macro-roles, theta roles)、文法関係、およびトピックの配列パターンは以下のようになっている。AF・PF構文(13a)・(13b)では、Aが主語、Pが目的語と結合していて、共に能動文であって、これらに対してPを主語、Aを斜角目的語とする受け身文(13c)が対立している。

(13) AF, PF, Passive alignment patterns

a. AF construction	A SUB TOP	P OBJ NON-TOP
b. PF construction	A SUB NON-TOP	P OBJ TOP
c. Passive construction	A OBL NON-TOP	P SUB TOP

6. では、AF構文をAV (Actor voice)、PF構文をUV (Undergoer voice)などとし、トピック化をヴォイス交替として取り扱う近年の風潮はどうか。この問題については、トピック化と受け身化など、通常ヴォイスとして取り扱われる現象とはどのように類似していて、どのように違っているのかを見極めて、判断を下さなければならない。

タガログ語のトピック化を新たなヴォイス体系として取り扱い始めた Foley (1998) や、インドネシア、バリ語のトピック化を同様に取り扱い始めた Arka (2003)などは、ヴォイスについて徹底

した考察の結果そのような判断を下したのでない、その動機は十分に定かではないが、オーストロネシアのトピックを主語と見做し、トピック化はそれを軸に行われるので、同現象をヴォイス現象であると認定したのだと想定される。このようなアプローチには、主語とはどういうものか、トピックとはどういうものかという、文法関係と、トピック化ならびにヴォイスについての定義的な問題が潜んでいる。

「主語」については、Keenan (1976)などに影響された見解が主流となっているが、形態・統語特性を列挙したショッピング・リスト的アプローチには問題がある。一つの言語において、二つの統語範疇に配分されている形態・統語特性が他の言語(例えば英語)では、一つの統語範疇に集中している可能性があるからである。西オーストロネシア諸語では、(7)・(8)で見たように、他の言語では主語が集中して担う統語特性が二つの範疇(主語とトピック)に分割されているものがあるので、Keenan のようなアプローチでは、どちらを主語と見做すのか、という問題が生じる。Schachter (1976)がタガログを使って議論した通りである。(Schachter は中立的立場という観点から、(7)の主語特性を持つ文法項を Actor と呼んでいる。以下参照)

このようなアプローチに代わって、最近の類型論的アプローチでは、P を除外し、S と A が共に関与する現象が見られる場合に限って、主語という文法関係を認めるというもので、主語とは S が A と統語的に同化した結果生じる範疇であると考え。つまり、主語は A に依拠した統語的一般化を成立基盤としているのである。ササクにおいて、S と A が対象として働く現象が(7)に挙げたようなもので、このことから、この言語においては S と A が一つの文法項グループ、すなわち主語範疇を形成していると結論づけられるのである。

一方、トピックは、S、A、P といった文法項の統語的一般化とは関わり合いが無く、日本語においても、オーストロネシアにおいても、「既知」(Known/Given)、「定」(Definiteness)や、「特定」(Specific)などといった、語用論的な要因によって規定される文法範疇である。

このように、主語とトピックは、二つの異なった要因をその成立基盤とする文法範疇であって、これらを同一視することはできない。したがって、たとえトピックが他の言語では主語が担う統語特性を有していても、そのことによって、トピックを主語と同一視することには根本的な問題がある。(これは、キリスト教徒もイスラム教徒も、共に神に祈りを捧げるという行動特性を有するが、これによって二つの宗教を同一視することには問題があるのと同じことである。)

しかしながら、トピックもそれを有する言語においては、主語と同じく、構文を構成する名詞句のうち最も中心的な要素であることに変わりはない。ヴォイスの定義を主語に限らず、統語的に最も中心的に働く統語範疇(ある言語では「主語」、ある言語では「トピック」)を基軸とした現象と考えればどうか。このように考えれば、オーストロネシアのトピック化もヴォイス現象として取り扱える可能性が出てくる。しかし、このアプローチだと、日本語のトピック化、「太郎が本を読んだ」・「太郎は本を読んだ」・「その本は太郎が読んだ」などの交替もヴォイス現象として取り扱われることになる。それで良いのであろうか。

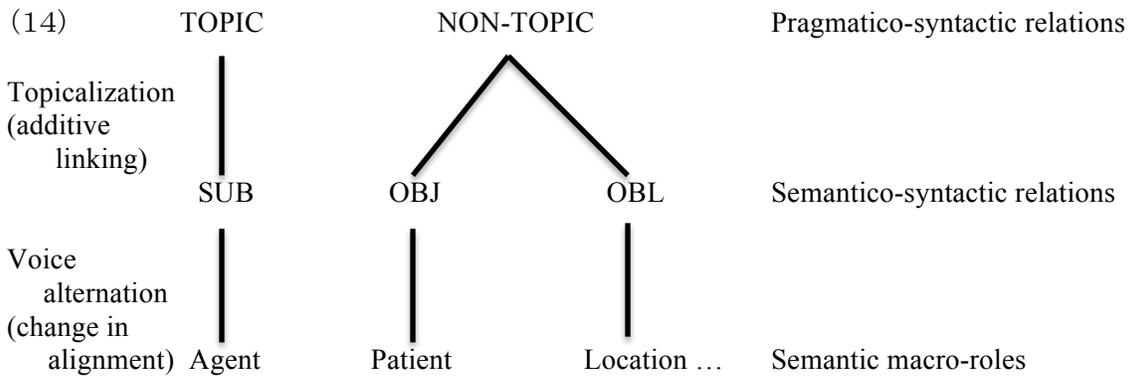
7. 「その本は多くの人達を読んでいる」と「その本は多くの人達に読まれている」の間には、根本的な相違があり、二つを共にヴォイス現象と見做すことには大いに問題がある。それは、(13)の表示が明らかにするように、文法項の結合 (Alignment) パターンにおいて、受け身のようなヴォイス現象と、トピック化とは顕著な違いを呈するということである。(13a) と(13b)の比較から明らかなように、トピック化においては、動作主・主語、対象・目的語の結合パターンには変更をきたさない。主語がトピック化しても(13a)、目的語がトピック化しても(13b)、動作主は主語であり、対象は目的語である。このことは、日本語の「この本は太郎が読んでいる」においても同様である。(標準語では「この本をは」とならないが、方言によっては目的語がトピックになっている場合には、目的語標示が維持されるものがある。Cf. Him, I can't help.)

一方、AF 構文(13a)・PF 構文(13b)と受け身文((13c)を見比べれば明らかなように、受け身化(その他通常ヴォイスとして取り扱われる現象)においては、主語・目的語といった文法関係のレベルでの変換が起こっている。受け身文では、対象が主語となり、動作主は斜格目的になっている。この文法関係の変換は、ササクにおいてはクリティックの支配パターンの変化として((10)・(11)参照)、そして英語では一致の支配パターンとして、具現化されている。

つまり、ヴォイス交替は文法関係の変換を伴うのが一般的であるのに対して、トピック化は文法関係のあるものをさらに語用論的に規定された文法範疇と関係づける操作である。ヴォイス現象の文法関係の変換(alteration)に対して、トピック化とは、新しい文法範疇を追加的(additive)に付与する現象であって、二つは根本的に違った文法現象である。

トピック化が文法関係の変換でなく、追加的な操作であるということは、主語基盤のトピックは、主語の統語特性を引き継ぐことであり、事実 AF 構文のトピックは(7)・(8)にあげた統語特性をすべて持つことになる。このことは、日本語の主語トピック(「太郎はこの本を読んでいる」)でも同様で、三上章のいう主語「兼務」のトピックということである。一方、目的語がトピックになっても(「この本は太郎が読んでいる」)、主語(「太郎が」)は主語のままである。ササクも同様で、PF 構文では、トピックでない主語が依然としてクリティック化(その他の現象)を支配する((10)参照)。受け身の交替では、目的語が主語になれば、能動文で主語であったものは主語でなくなる((11)参照)。以上によって、「主語トピック」、「目的語トピック」といった複合的文法関係は認められるが、「目的語 主語」、「主語 斜格目的語」といったものは有り得ない。かつての「関係文法」(Relational Grammar)が明らかにした通りである。

以上を図式化すると、次のようになり、ヴォイス交替は意味役割と意味・統語的に規定された文法関係との対応関係の変換を対象としているのに対して、トピック化は意味・統語的文法関係と語用・統語的文法関係との間の追加的結合パターンを対象とした現象である。



以下が日本語における文法項のさまざまな結合パターンである (Cf.(13))。

(15) 多くの人たちが今この本を読んでいる。 (A=主語; P=目的語)

A	P
SUB	OBJ
NON-TOP	NON-TOP

多くの人たちは今この本を読んでいる。 (A=主語=トピック; P=目的語)

A	P
SUB	OBJ
TOP	NON-TOP

この本は今多くの人たちが読んでいる。(A=主語; P=目的語=トピック)

P	A
OBJ	SUB
TOP	NON-TOP

この本は今多くの人たちによって読まれている。(A=斜格目的語; P=主語=トピック)

P	A
SUB	OBL
TOP	NON-TOP

8. 以上、西オーストロネシア諸語におけるフォーカス構文と受け身文を比較しながら、ヴォイス現象とフォーカス構文および日本語のトピック化の相違を検討してきた。その結果、後者二つはヴォイス現象とは位置付けられないとの結論に達した。

オーストロネシアのフォーカス構文と日本語のトピック化には、上に見たように重要な共通点があるが、また相違点もある。その一つが、オーストロネシアのトピックは、存在文や感嘆文などを除いて構文の必須項であるが、日本語などでは、トピックを持たない文が可能である((14)参照)点である。このことから、オーストロネシアのトピックは、西洋語などの主語により近いと言えるが、トピックと主語とは、上に論じたように異なった基盤の上になりたつ文法範疇である。(イスラム教とキリスト教は、仏教に対してよりも近い関係にあるが、そのことから前者を同一視することはできない。)

このように、同じトピックという用語を使っても、それは重要と思われる共通の特性を捉えるためのものであって、そのことによって比較対象となっている文法範疇が全ての点において同一であるということの意味しない。ヴォイスという用語についても状況は同じで、要するに用語の使用には、言語間・現象間の類似と相違の本質を見極める作業が伴わなければならないということである。